

曾爾の学校

1 はじめに

“ようこそ曾爾村へ、そして、国立曾爾少年自然の家へ”

みなさんがこの山あいの村を訪れるには、榛原町をとおって国道 369号線を北東に進むのと、三重県名張市を経て県道 81号線を南西に向かう二つのルートがありますが、その道すじに村立の二つの小学校と一つの中学校があります。この冊子では、これらの学校の生い立ちや、今、学校がかかえている問題にスポットをあて、みなさんがこの村をより知っていただくための資料に、また、みなさんの町や村の学校、自分の学校のことと重ね合わせながら、これからの学習に役立ててもらったらと願っています。

2 村の学校の生い立ち

A 学校の夜明け

イ 寺子屋から学校へ

「ザンギ! 顔をたたいてみたら、文明開化の音がする」と江戸幕府がたおれ新しく生まれた明治政府は、近代国家づくりの足がかりとして、ヨーロッパの国々の制度をとり入れて、いろいろな面で改革をはかりました。その一つとして教育を広く国民に広めるために、明治 5年 (1872年) に学校制度をつくりました。そして翌年に全国に学校がつくられ、それまでの寺子屋から学校での学習へと変わりました。

ロ 産声をあげた曾爾の学校

その頃町から遠くはなれた曾爾村では、学校を開く体制がととのわず、ほかの地域より一年おくれて明治 7年 (1874年) によく生まれました。学校の名前は置かれた大字「タイジ」と読む の名前をとって今井小学校ともう一つは、伊賀見小学校と呼ばれました。開校しても校舎を建てるお金やいとまがなかったので、当分の間お寺の本堂や神社の社務所を仮の校舎としてはじめました。当時は、せまい田や畑をつくる農家がほとんどで、くらしも貧しく、また、父や母の教育について関心も低かったので学校へくる子ども的人数は、男の子は全体の半分ぐらい女の子は三分の一ほどでした。

ハ 新しい校舎づくりと村の人のなやみ

年月がたって教育への関心が高まるにつれて学校へくる子どもの数もだんだん増え、お寺や神社を借りての仮校舎ではせまくなり、開校後 4~ 5年後小さいながらも二つの小学校の校舎が完成しました。しかし、この建築にかかる費用は、今のように国や県の補助金によってまかなうのではなく、村内の大字に割り当てられた建築負担金と個人の寄付金によって建てられました。また、建てるため必要な労力も村民の奉仕作業によっておこなわれ、それらの負担は村の人たちに重くのしかかっていきました。

二 明治時代後半の学校 (1890年 ~ 1910年)

この頃、今井小学校、伊賀見小学校の名前でスタートした二つの小学校は、今井小学校が上曾爾小学校に、伊賀見小学校が下曾爾小学校とそれぞれ校名が変わりました。

高等科の誕生

この頃、中学校や女学校 (今の高等学校)へ進学するには、進学校が曾爾から遠くはなれた土地にあり、また、交通も不便な時代だったので、家をはなれて下宿生活をしなければならず、生活や学費などたくさんのお金がかかり、ごく一部の子どもしか進学できませんでした。6年卒業後もっと勉強したいと願う子どものために、小学校の中に高等科 (二年制)をつくりました。高等科は、義務教育ではありませんでしたが授業料がいきました。(高等科がつくられた頃の授業料は20銭)

学校林を育てる 学校建築にむけて -

高等科が置かれ、年の移りかわりと共に学校へくる子どもの数も更に増えましたので、また、校舎を建てました。これを機会に大字今井に置かれていた上曾爾小学校が今の位置の長野に移されました。相つく校舎の建築でたくさんのお金を出し、財政が苦しくなった各大字では、これからの校舎の建てかえの費用や学校の備え付けの品物を買う費用にあてるために、村の援助を受け、大字が持っている土地2~3ヘクタールに杉や桧の苗木を植え、大字の人たちが労力を奉仕して植えた木の手入れなどの仕事を受け持ち将来に備えました。これが、今も各大字の財産として残されている学校林と呼ばれている山林です。

B 戦前の学校 (大正時代 ~ 昭和時代)

イ 学校名を一つに

大正時代の中頃 (1920年頃)には、児童数が学校が生まれた頃に比べて8倍近くにもなり、またまた、校舎が建てられました。この頃、二つの小学校は校舎はそのままで校名が一つになり、曾爾小学校と呼ばれるようになりました。元の上曾爾小学校は本校、下曾爾小学校は分校としておかれ、高等科は本校にだけつくられました。

ロ 子ども達の生活

服装や通学のようす

大正時代の通学の時の服装は男女共木綿の着物姿で、はき物は、わらぼうしや下駄でした。特に、本校にある高等科に通う分校の子どもの中には片道9キロの道のりを歩いて通う子どももおりましたが、この子たちのはく通学用のわらぼうしは二日と持ちませんでした。通学かばんは、古くは風呂敷に教科書をつつみ腰に巻いての出で立ちだったと古老は話されていました。年月がたつにつれて着物も男の子は学生服に、女の子もセーラー服に変わり、はき物もゴム製の短靴 (今のゴム長靴の下の部分を切った形、布靴と同じ形で全部ゴム製)、そして、今のような布製靴へとかわり、かばんも布製の肩かけかばんへとかわっていきました。本校の高等科に学ぶ分校の男の子の中には自転車で通学する子どもも出てきました。

遊びや生活のようす

学校での遊びは、男の子は、すもうやドッジボール、メンコなど、女の子は、お手玉遊び、おはじき、あやとり、輪ゴムをつないでのゴム跳びなどでした。

当時は学校給食がなかったので学校に近い子どもは家に帰って昼食をとり、他の子どもは弁当を持ってきて教室で食べました。お正月あけの3学期のはじめ頃は、正月のお餅のつけ焼きを御飯がわりに弁当として持ってきて、友達どうしが御飯とお餅をどかえっこして食べる風景も見られました。放課後は今のように部活動やクラブ活動もありませんでしたので、授業が終わると子ども達は家路を急ぎました。家では仕事が待っているからです。当時は、生活が苦しい中での子たくさん（ふつうで兄弟が5人くらい、多い家では10人も）ですから子どもにとっては家の手伝いは、家族のひとりとしての大切な役目でした。男の子は、その当時さかんだった養蚕の手伝いや畑仕事の手伝い（畑をくわでたがやすなど）、女の子は、田畑で働くお母さんにかわっての炊事、弟や妹の子守りなどでした。

修学旅行への旅立ちの朝（大正時代はじめ）

「気づけていっといで」(気をつけて行って来なさい。) 10月半ばの夜の明けきらないある朝、提灯(ちょうちん)片手に見送ってくださる家の人の声を暗やみの中に聞きながら待ちに待った三泊四日の奈良、京都、大津への楽しい修学旅行への旅立ちです。今のようにバスも通っていませんし、近鉄線も開通していない頃ですので約35キロはなれた国鉄の初瀬の駅(桜井市初瀬町 - 長谷寺のある町)をめざし、この日のために新調した木綿の着物にわらぞうの底がすり切れて使えなくなりかばんに入れていた下駄とはきかえて歩きつづけ、初瀬に着いたのは10時をとくにすぎているようです。ここから汽車に乗って最初の見学地奈良へと向かいました。当時の修学旅行の費用としては、小遣金が50銭(今の1円の半額)程度で旅費、宿泊費合わせて8円程だったそうです。

儀式と分校の子ども達

この頃、学校では行事の中で入学式、卒業式を含めて6回の儀式がおこなわれました。儀式はみな本校でおこなわれましたので、分校の子ども達は、約4キロメートルの道のりを先生に連れられて参加しました。入学式や卒業式をのぞいた祝日の式のあと、お祝いとして赤と白のおまんじゅうが渡されました。幼心にそれをもらうことが楽しみで遠くまで歩いて参加することがそんなに苦になりませんでした。

C 戦時中の学校

イ 国民学校と名前が変わる

戦雲ただよぶ昭和16年(1941年)4月、全国一斉に小学校が国民学校と改められ、曾爾小学校も曾爾国民学校と名前が変わりました。この頃、戦争のため食料をはじめ、いろいろな品物が不足しました。たりない米のかわりに大切な運動場をたがやして『さつまいも』づくりをしました。先生勝ちます」も、この頃の子供達の先生に対するあいさつでした。また、兵隊として出て行く人たちの見送りも小学生の役目でした。高等科の子供達は、冬の雪の降りしきる中、先生に連れられて、雑木林で声高らかに軍歌を歌いながら炭焼き作業をしたのもこの頃ならではの思い出です。

ロ この頃の子供達の様子

「きょうも学校へ行けるのは、兵隊さんのおかげです」これは、この当時の子供達に歌われた「兵隊さんよ、ありがとう」という歌の歌詞の一部です。兵隊として父や兄を送り出した家では、手不足で家の仕事はお母さんの肩にかかり大変でした。子供達は手助けのため、放課後や休みの日は小さい学年の子を除いて、遊んだり家庭学習するゆとりはほとんどありませんでした。時には、学校を休んで家の仕事を手伝う子供もいました。

「欲しがいません、勝つまでは」『ぜいたくは敵だ』の標語の実践として学校で決められた月一回の日の丸弁当(御飯の上に梅ぼし一個のせた弁当)も、戦時中のぜいたくをしないための小さな実践として、この頃の学校生活を知る一つの例です。この時代の進学率は5~10%程度で、他はほとんど戦争のための品物をつくる工場へ就職しました。

D 戦後の学校

イ 六三制と三つの学校の誕生

昭和20年(1945年)日本は戦争に負け、昭和22年(1947年)新しい憲法のもとで日本の民主化が進められ、その一つとして六三制という新しい学校の仕組みがつけられ、この制度によって曾爾村の学校も変わりました。昭和22年4月に新制中学校として曾爾中学校が生まれ、曾爾国民学校本校は上曾爾小学校として、分校は下曾爾小学校としてそれぞれひと立ちし、三校が新しい歴史をきざむことになりました。

ロ 急ごしらえの中学校のスタート

新しく開校した中学校は、校舎もなければ机、椅子なども不十分でした。校舎は当分上曾爾小学校の教室を借りることになりました。机や椅子もすく間に合わず、やがて卒業する三年生と入学してきた一年生とは借りたものを使い、二年生は、2つの椅子の間に3メートル位の板をわたして机がわりにし床板の上にゴザを敷きそこに三人ぐらゐをグループにして急造の机で学習しました。

このように一つの校舎の中で小学校と中学校が一緒に生活するという変わった形でスタートしました。新しくつくられた部活動の野球部で布製のグローブを使ったのもこの頃でした。

ハ 寄り合い世帯のなやみ

小中学校の相住まいにはいろいろな不便やなやみがありました。校時のちがひ、講堂(儀式など全校行事や雨天時の体育授業に使用 この頃体育館はありません)の共同使用や特に運動場の共用は、体育の授業や体育の行事について使用について連絡し合う上でたいへんでした。50年間の長い間つづいた曾爾中学校と上曾爾小学校の合同運動会は運動場共用の落し子でした。ところが二つの学校の相住まいのしんどさに輪をかけるように昭和24年(1949年)地域からみて高校進学への道がとざされている働く若者への学習の場として、ここに県立榛原高校の分校が置かれたため、小中高三校が同じ校舎と同じ運動場を使うというほかではみられない状態がおこってきました。

ニ 相住まい解消へ

相住まいの校舎になやむ学校に対して村や地域では、貧しい財政の中から相次いで校舎の新築にふみきってくれましたが、農地が大切な時代でしたので他で敷地を買い入れることができず、同じ校地内に建てられたので校舎の共用は解消されました。しかし、共同で使用することは解決されませんでした。

< 村内各学級の改築のようす >

曾爾中学校々舎【木造】- - - - - 昭和32年
榛原高校曾爾分校々舎【木造】- - - - - 昭和35年
上曾爾小学校々舎【鉄筋コンクリート造】- - - - - 昭和35年
下曾爾小学校々舎【鉄筋コンクリート造】- - - - - 昭和38年

ホ 伊勢湾台風の襲来とその後

近づく秋の運動会の練習にあけていた昭和34年(1959年)9月26日村を襲った台風は、風そのものより400mm近い集中豪雨により村の各所でくずれ、橋が流され(曾爾村にかかる橋がほとんど流された)田畑が水をかむり、住宅が水につかるなど村始まって以来の大きな被害を受け、陸の孤島となりました。この台風によって上曾爾小学校は床上まで水につかり、土や砂、石などで使えなくなりました。加えて、建築中の新校舎の型わくも強い風で吹っ飛び、工事を進める上で大きな影響を受けました。また、当時中学1年生だった女生徒は家と共に濁流にのまれ、翌朝遺体で発見されるという痛々しい事故もありました。他の二つの学校は幸い大した被害を受けませんでした。台風によって通学路がたたれたため、約半月、村内の学校は臨時に休校をしました。孤立した村へは榛原町を基地としてヘリコプターによって米をはじめ、日用品、学用品などが送りとどけられ、各地の人々の善意に感謝する日々が続きました。翌35年から復旧工事が急ピッチで進められ大きな建設会社による大規模な工事がはじまりました。ダン

ブカー、ブルドーザーなど大型の建設機械をはじめ目にし、驚きの中に、これらの工事の現地見学も新しい学習の一つとしてとり入れられました。工事が進むにつれて建設作業員やその家族の方々も入村され、村の人口が増え、多くの子ども達も転入し、一時的でありましたが、どの学校もこの頃子ども数が最高を記録しました。〈 昭和35年度上曾爾小学校児童数 313名〉

へ 高まる進学率、減る児童生徒数

進学率の高まり

六三制ができた終戦間もない頃、10%前後であった高校進学率も年と共に高くなり、昭和40年(1965年)の中頃になりますと就職率を逆転しました。これは保護者のみなさんの高校進学への関心が高まり「せめて高校だけは卒業させて」という父母の願いに加えてこの頃、好景気から家庭の暮らしが安定してきたことなどがこの傾向を生み出したのではないのでしょうか。とりわけ、昭和50年(1975年)以降一層の高まりを見せたのは、県の奨学金制度(進学者に必要なお金を貸すしくみ)とともに曾爾村も高校、大学進学者に対しての奨学金制度をとり入れたのが進学率を高めた大きな力となっています。近年の進学率(高校)は、ほとんど100%です。

児童、生徒数のうつりかわり

新しい学校制度で出発した昭和22年には村内三つの学校で合わせて800名近くいた児童生徒が50年あまりたった今、230名となりました。そのうつりかわりをみますと終戦から数年間は一時的に増えましたが、その後は減りつづけ昭和35~36年頃は、伊勢湾台風の復旧工事による工事関係者の入村による子どもの転入で一時増えましたが、資料「村内小学校の児童数のうつりかわり」にみられるように年々減っています。特に昭和40年代の減りようが大きいのは、農村の不況からのがれる若い人達の町への移住がこのような傾向をつくり出したのではないのでしょうか。その後は年によって多少の増加もありましたが、今なお減りつづけています。

ト ふるさと学習への取り組み

今、村内の小・中学校では、ふるさと曾爾村をより知ることを通して、村を愛する心を育てるための学習をいろいろな形で取り組んでいます。特に曾爾中学校では、今後の進路についての学習の中身として、村を知ること自分を知ることであり、村を愛するということは、自分を愛することであるという考え方から必須クラブを「ふるさとタイム」と名づけて、ふるさと文化を中心とした学習を村内の各面のベテランを指導員として招き、毎週土曜日に学習しています。

主なクラブと活動内容を紹介しますと

ふるさと芸能クラブ.....江戸時代より280年の歴史を持ち、奈良県無形民俗文化財の指定を受けている獅子舞について理解し、その技能を身につける。

ふるさと物産クラブ.....竹やわらを使って、竹とんぼや一輪ざし、わらざうし、しめ縄など村内に伝わる民芸品をつくる。

ふるさと語り部クラブ...村に伝わる民話を中心に指導者から話を聞き伝承できる。
このクラブ活動は1999年11月の進路指導研究会に各地から参加された先生方に発表

3 あとがき

ここまでは、曾爾村の学校の誕生から130年たった今までの足どりについて書きましたが、ここで、今、曾爾村の学校がかかえている問題点やなやみについて考えてみますと

A 高校進学と家計

町から遠くはなれた山村の曾爾村の学校に学んだ生徒たちの進学は、不況にあえく農林業を営む家計にとって、たくさんの学費が家計のやりくりにな大きな問題となっています。曾爾中学校のPTAが進路調査をした中で通学方法や費用について集計した結果が次のように報告されています。

イ 進学後の住居の状況

自宅 - - - - 48%

自宅外 - - - - 52%

ロ 通学方法と所要時間

自宅より- - - バス、電車利用 - - - 1~ 2時間

自宅外より- - 徒歩、電車利用 - - - 30分 ~ 1時間

ハ 費用

自宅より- - - 3万円 ~ 5万円 (交通費 2~ 3万円、学費 2万円)

自宅外より- - 6万円 ~ 10万円

(交通費 2万円、学費・生活費 4万円 ~ 8万円)

< 費用は、全体的な傾向で、個人個人ではもっと支出している。 >

自宅より高校までが遠距離にあるため自宅よりの通学生徒は、高額の通学費と早朝の出発や長時間の乗車時間の疲労が、自宅外通学生徒は、日々の生活費や特に住居費(家賃等)が大きな負担となっています。

B 児童生徒数の減少

先に書きましたように村の小・中学校の子ども達の数 は年々減ってきました。資料「これからの村内小学校の児童数のつりかわり」にみられるようにこれからも減ることが予想され、近い将来二つの小学校の一部の学年が複式学級（ちがった学年がよって一つの学級をつくるしくみ）をつくらなければならなくなります。このため村の教育委員会では、二校合わせて150人に満たない人数の少ない学校のこれからをどうすることが、これらの学校で勉強する人達のしあわせにつながるかを広く村の人達の声を聞こうと村のいろいろな立場にある代表の方々でつくる「小学校運営検討会」という会をつくり 毎月1回、会議を開いて話し合っています。一方、村ではこのような現象をくい止めるために村長さんが「生まれてきて良かった曾爾村、住んでみて良かった曾爾村、来てみて良かった曾爾村」をキャッチフレーズとして、「若い人達の住み良い生き生きとした曾爾村」をめざして村をあげていろいろな取り組みが進められています。ふるさとを愛し、ふるさとに生きることをめざしている三つの学校の「ふるさと学習」が将来子ども達がふるさと曾爾にしっかりと根をはって生きていく足がかりにと願っています。

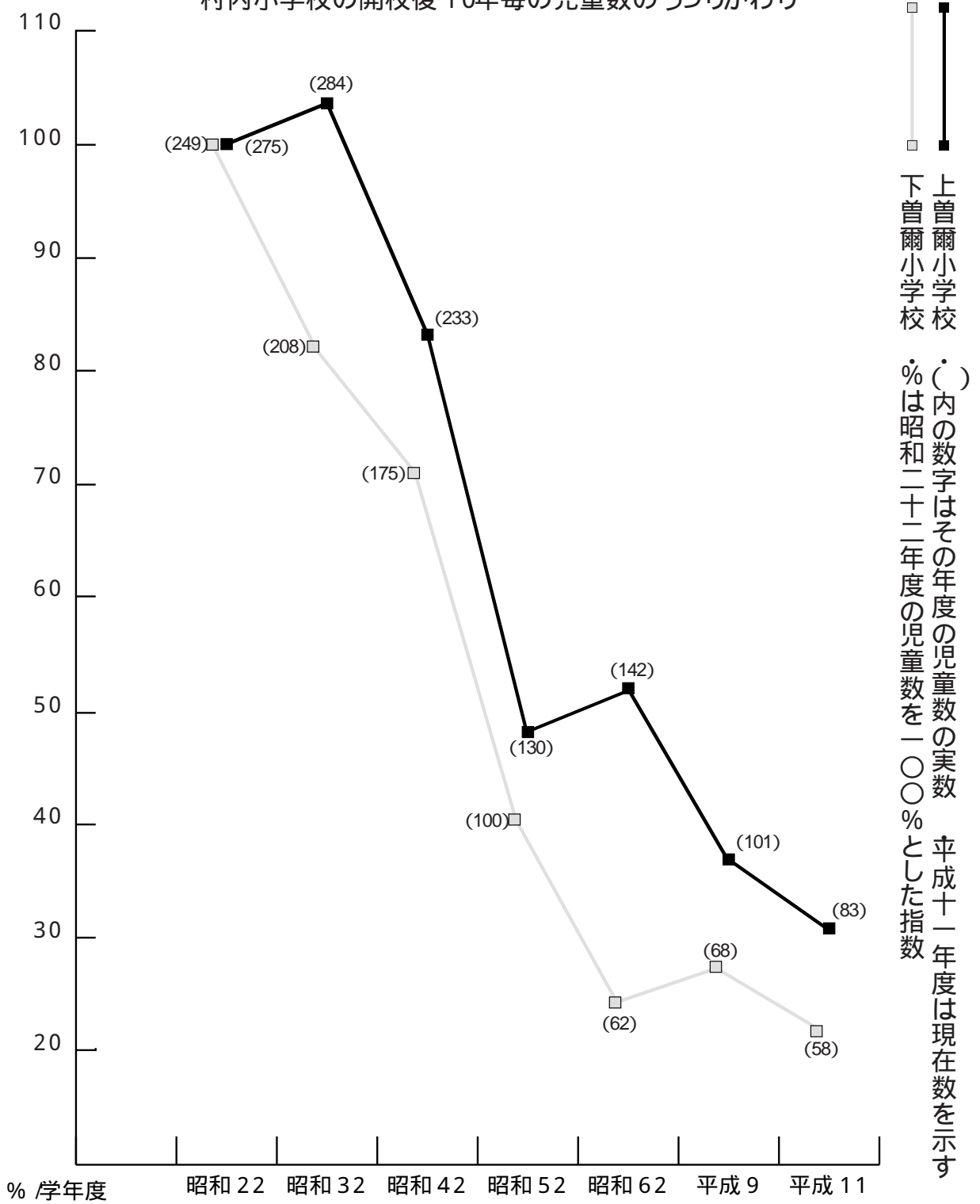
4 結び

明治は遠くなりけり」明治のはじめから私達の祖先がへき地（都会から遠くはなれた不便な土地）という悪い条件の中で、後の世のためにと苦しい暮らしの中で、「わしらが学校」を守り育ててくださったご恩は、決して忘れる事ができません。この村をたずねられたみなさんにもこの冊子をとおして、この事に共感していただき、また、曾爾村をよりよく知ってもらうための資料にと願っています。

おわり

参考資料	・曾爾村史 ・村内各学級の沿革誌 ・曾爾村教育委員会調査資料 ・ふるさと研究紀要（曾爾中学校刊行）
話	細谷善一氏 寺前キヨ工氏（お二人とも 太良路在住 83歳）
執筆者	岩坂 周

村内小学校の開校後 10年毎の児童数のうつりかわり



村内小学校のこれから6年間の児童数のうつりかわり

この児童数は平成十一年十月までの出生数と在学生の数をもとに出されています（曾爾村教育委員会の調査資料より）

